

# いわゆる受験英語「構文」・「公式」の系譜

—『難問分類英文詳解』と『新々英文解釈研究』（9訂版）の「構文」比較—

谷 明信\*・西村公正\*\*

(平成17年10月31日受理)

## Lineage of “Kobun” or English Sentence Structures Selected for Japanese Learners: Comparison of Nannichi’s and Yamazaki’s

Akinobu TANI・Tadamasa NISHIMURA

キーワード：受験英語構文・公式、南日恒太郎、山崎貞、『難問分類英文詳解』、『新々英文解釈研究』

### 1. はじめに

英語教育史の分野で英語参考書は扱われるが、教科書の研究と比較すると、英語受験参考書の研究は周辺的であると言えよう<sup>1)</sup>。しかしながら、実は受験英語参考書こそ、英語学習に大きな影響を現代まで与えてきたのではないかと考える (cf. 竹内 (1991))。このような前提に立ち、本論では受験英語について、特に「構文」に絞って、その系譜を扱う。

「受験英語」は、評判が良いとは言えない。最近では、「受験英語」こそが、コミュニケーションのための英語の障害であるとの批判も多い。例えば、河上 (1991) は、次のように批判する：

今では使わなくなった古い語法、最初から事実と合致していなかった文法規則、文法上は言えるはずだが英語の母語話者 (native speaker) が使うことのない英文や語句などを、十年一日のごとく教えていることが日本人がまともな英文を話せず、書けないことの最大の原因なのである。

また、南日恒太郎『難問分類英文詳解』（明治36年）を取り上げ、川澄 (1979) は次のように批判している：

そのために、以後英語に志す学生は、切り刻まれたヴィクトリア朝の思想を訳読することに憂身をやつすことになるのである。これが英語教育の性格をゆがめ、病的なものにしてゆく。

このように、いわゆる受験英語に対しては、その実態を検証しない、このような論調の議論が多い。一方、山崎 (1979) の改訂を行った佐山栄太郎は、序文で次のよう

に述べている：

従来、入試問題と言えば、「受験英語」という一種軽侮の含みを持つ言葉で扱われて来た嫌いがある。私は「受験英語」などと言う特殊な英語があるとは思わない。英語はどこまでもただ英語である。

少子化とともに、受験生の大学への全入という事態を目前にして、受験英語と言うもの自体が消滅しつつあり、この事を伊藤 (1997) も既に指摘している。一方では、コミュニケーションのための英語という大号令のもと、ここ10年近く行われてきた英語教育にもかかわらず、生徒達の英語の実力は、英語を聞く・話すことはもちろん、読む・書く力まで減退した。そのため、最近では、冷遇されてきた英文法が再度脚光を浴び、英文法を冠したさまざまな参考書が出版されるという有様である。このような状況の下、受験英語といわれるものを冷静に具体的に分析評価し、現代の英語教育に対する反省材料とする必要があると考える。

さて、「受験英語」と言う際にそれと特に結びつけられるのは、いわゆる「構文」・「公式」（以下、「構文」）を中心とする英文解釈法であろう。外山 (1979) は、この「英文解釈法は珍しく国産である。それに似たものすら英米にはなかった。徒手空拳、無から作り上げた努力の結晶である」という。これらの「構文」は明治後期に創出され、連綿と現在まで続いてきている。

本研究の目的は、「近代の日本が生んだ誇るべき独創的体系化」（外山 (1979)）である英文解釈法、特に、そ

\*兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 言語系教育講座 \*\*関西外国語大学短期大学部

れを特徴づける「構文」が、ベストセラーの受験用の英文解釈参考書でどのような重なりがあるのかを調査・考察し、それらの影響関係と独自性を調査することである<sup>2)</sup>。調査対象の一方は南日恒太郎『難問分類英文詳解』(1903、明治36年)、もう一方は山崎貞『新々英文解釈研究』(1979、9訂版)である。書誌学的には山崎貞の『新々英文解釈研究』の前著である『公式應用英文釋訳研究』(1912、大正元年)に当たるべきであるが、昭和になっても多くの学習者に使われ続けてきたという影響と過去の「構文」主義の英文解釈書の最終形ということに鑑み、9訂版を用いた<sup>3)</sup>。

## 2. 英語受験参考書

### 2. 1 「構文」主義の英文解釈書の系譜

日本の受験生の社会史を検討する竹中(1991)は、「明治40年にはすでに、受験参考書や予備校などの受験の時代の小道具や大道具が完備していた」と述べ、予備校の存在と参考書、特に南日恒太郎の英語参考書の存在を指摘している。

そして、南日恒太郎の『難問分類英文詳解』(1903、明治36年)こそが、それ以降の英文解釈法の特徴となる「構文」を成立させたものである(出来(1994))。この二年後の明治38年には、その改訂版に当たる『英文解釈法』が出版され昭和初期まで、出版され続けた。その後、このような「構文」主義を引き継ぐ英文解釈法として、山崎貞『公式應用英文解釋研究』が1912年(大正元年)に出版された。この書は後に改訂され『新々英文解釈研究』となり、昭和の終わりまで約80年近くに渡り、英語学習者に使われ続けた。また、1921年(大正10年)には、小野圭次郎『最新研究・英文の解釈・考へ方と訳し方』が出版され、山崎貞ほどの長寿ではないものの、昭和40年代まで改訂され出版され続けた(荒牧(1968))。

これらの3冊以外にも多くの英語受験参考書が出版されてきたが、ベストセラーと言う点と、その息の長さという点からは、これら3冊がもっとも重要な「構文」主義の英文解釈書と言えよう。「構文」主義の英文解釈書は岡田(2000)のように現在でも出版されているが、以前ほど多くはない。

### 2. 2 「構文」とは

受験英語「構文」とは何だろうか。簡単なようで、その定義は難しい。「構文」主義の英文解釈を批判し独自の英文解釈体系を創出した伊藤(1997: 39-40)は、「構文」を定義し、「構文」主義の英文解釈法を批判する：

英文解釈で昔から「公式」と呼ばれてきたものの多くは、what you call=「いわゆる」、hardly … before「…するやいなや」のような形で、その言いかえとしての日本語を示すだけに終始して

いる。この場合、「公式」選択の基準となっているのは、そのような表現が英語の次元で多数の表現の基礎または母胎となっているということではなく、日本語への言いかえにあたって特別な表現を必要とすることでしかなかった。英米人にとっては本来は熟語ですらないものを、日本人の理解しにくいという理由、極端な言い方をすれば、自分が訳語を見つけるのに苦労したというだけの理由で、「公式」として取り上げていることが多いのである。その選択が「恣意的」としか評しよう

がない場合が多いのは当然の論理的帰結であろう。伊藤は基本的には熟語が「構文」の中心ととらえている。しかしながら、「構文」が何たるかを理解する上で重要と思われるのは、上記の主張の中の「英米人にとっては本来は熟語ですらないものを、日本人の理解しにくいというだけの理由で、「公式」として取り上げられるものが存在するという点である。

この点を検討するために、外山(1979: 40-41)を引用する：

学校も生徒も、英文解釈は「構文」を扱っていると信じている。しかし、実際を見ると、『新々英文解釈』が取り上げているものは主として、語句である。…漢文の訓点読みの代用の働きをしているのは、相関語句の部分である。なかでも(35)‘Leaves are to the plant, what lungs are to the animal.’といったものは、文法や辞書ではうまく処理できないから、解釈法の独壇場ということになるであろう。

このように外山は「構文」が二種類からなり、特に相関語句の重要性を指摘している。

このような事に鑑み、「構文」とは、内容語を中心とする単なる熟語というよりは、多くは機能語を含んでいるが故に日本人が理解しにくい、熟語ないし熟語もどきの相関語句や語の sequence であると、暫定的に定義しておく。ただし、時代が下るにつれて、「構文」という名のもとに、統語的な項目、特に動詞型に関連する項目が包含される傾向にあることは明らかである(cf. 岡田(2000))。これは、Hornbyが完成させた verb patterns の影響が大きいと考えられる(cf. Hornby(1975: p. viii, “Acknowledgements”))。

## 3. 『難問分類英文詳解』と『新々英文解釈研究』(9訂版)の比較

本節では、南日恒太郎『難問分類英文詳解』(1904)と山崎貞『新々英文解釈研究』(1979)で取り上げられている「構文」を比較する。これらの書籍は、一方が「構文」主義の英文解釈法の嚆矢であり明治後期から大正初期にかけてのベストセラーで、もう一方は大正時代

後期に南日を駆逐し改訂されながら約80年近く命脈を保ったと言う点で、比較に値すると考える。

### 3. 1 『難問分類英文詳解』と『新々英文解釈研究』 (9訂版)の構成

南日(1904)は、品詞分類に従い、I. 名詞、II. 代名詞、III. 形容詞、IV. 動詞、V. 副詞、VI. 前置詞、VII. 接続詞の7つのパートに分け、それぞれを更に下位分類し、合計85の項目を立てている。一つの項目にいくつかの「構文」や語句が含まれているので、実際には255の「構文」が列挙されていることになる。そして、それらの「構文」に対して、1189の英文の例文が収集されている。そして、別冊として、解説と和訳が付いている。

一方、山崎(1979)については、改訂者である佐山栄太郎が構文の配列を「少し系統立てて、文法体系にやや近づけて」、「単語、熟語、関連語句の慣用法から文章構成の問題点へと進む仕組みにした」と述べている(山崎(1979: v-vi))。その配列は次の通りである:

- I. The の用法、II. Itself, oneself の用法、III. Of の連語、IV. One, the other, this, that などの用法、V. too --- to---, not --- too much などの用法、VI. As (so) --- as, so as to, so that, for fear lest などの用法、VII. Such --- as, such that, so much, so many, not so much --- as などの用法、VIII. 比較表現のいろいろ、IX. Few, a few; little, a little; seldom, hardly など、X. both --- and, not only --- but also など、XI. 時の前後、XII. May, might などの用法、XIII. Shall, should などの用法、XIV. Will, would などの用法、XV. 習慣的行動を表現する仕方、XVI. 仮定法のいろいろ、XVII. 命令法で条件を示すものなど、XVIII. 不定詞と過去分詞、XIX. 動名詞と分詞、XX. 文章中で遊離要素となる不定詞と分詞、XXI. What の用法、XXII. いろいろの使い方のある but、XXIII. With のいろいろな用法、XXIV. Do の注意すべき使い方、XXV. 動詞、形容詞などを名詞中心の句で現わすもの、XXVI. Take one by the hand の類型、XXVII. 受動態の働きをする特殊の動詞、XXIX. 注意すべき語順、XXX. 格言風の表現

これらのセクションを更に115に下位分類し、205の代表例文を付し、さらにより長めの英文問題を付している。

これら二書の最大の違いは、その解説の詳しさにあると言える。南日(1903)の解説は非常に簡潔すぎて学習者にとって使いやすいものとは言えない。一方、山崎(1979)は解説が丁寧で関連「構文」や、単文の例を多く含むなどの点で、ユーザーフレンドリーと言える。この違いが、大正後期に『難問分類英文詳解』が『新々英

文解釈研究』に駆逐された一因であるのではないか。

### 3. 2 『難問分類英文詳解』と『新々英文解釈研究』 (9訂版)の「構文」の比較

『難問分類英文詳解』と『新々英文解釈研究』で取り上げられている「構文」の重なりをまず考察し、それを通じて、全体的な比較を行う。また、山崎(1979)は現在我々が理解する「構文」を代表していると言えるものである。これを出発点として、南日(1903)の「構文」を考察する。

まず、南日(1903)と山崎(1979)の小項目の重なり度の比較を行った。その結果を下記の表1に示した。この表では、山崎(1979)の分類と例文と、それに一致する南日(1903)の「構文」の番号を示している。また、例えば、南日のI\_2は、項目Iの2番目の「構文」を示しており、さらに、ex.84は、「構文」の例文の84番を示している。

表1より、南日(1903)の255「構文」と山崎(1979)の205「構文」のうち、67「構文」において重なりがあることがわかった。つまり、約4分の1以上の重なりがあることになる。これらの重なりのあるものの多くは、どちらかと言えば、機能語を含む熟語と言えるようなものが多い。また、関連語句のなかでも、基本的なものが多く含まれていると言えよう。このような結果から、南日(1903)において、既に「構文」の概念は、かなりの程度確立されていたと言えよう。

山崎(1979)の項目から見ると、重なりのある項目に偏りがあることがわかる。たとえば、“but”を含む項目が9例と多い。また、「the の用法」や「itself、oneself の用法」も多く重なっている。しかしながら、山崎では7つの「構文」が挙がっている「時の前後」の項目のうち、1項目“no sooner ... than ...”のみが南日と重なっている。

次に、逆に重なりのない項目を見ることで、それぞれの著作での「構文」の特徴を見る。結論から述べれば、南日(1903)の「構文」の特徴は、1)より文法に則しており、「構文」というよりは文法で扱われそうな項目が多いこと、2)語彙項目が多いことである。

まず、南日(1903)において「構文」というより文法と言うべき項目が多いことについては、実際の項目をいくつか挙げる: ‘VII “It” used as Anticipative Subject,’ ‘VII “It” used as Anticipative Object,’ ‘VIII “Which” standing for a Clause,’ ‘XXXIII “Must” in the sense of inference,’ ‘XL Infinitives used as Subjective Complements,’ ‘XLL Past Participle used as Modifier,’ ‘XLL Past Participle used as Complement’ などである。これらは、形式主語の“it”、関係代名詞の省略、補語としての過去分詞などのように、学習者が

表1：南日（1903）と山崎（1979）の小項目の重なり度

山崎の大分類	山崎の小項目	南日
I. The の用法	1 What is learned in <b>the cradle</b> is carried to the grave.	I_2
	2 <b>The rich</b> are not always happy.	XXIV_1
	2 <b>The good</b> and <b>the beautiful</b> do not always go together.	XXIV_2
	5 He is <b>the last</b> person to do such a thing.	XXIII_6
	6 <b>The sooner the better</b> .	XVI_1
	7 I do not love him <b>the less</b> for his faults.	XVI_2
	7 I love him <b>all the better</b> for his faults.	XVI_3
II. Itself, oneself の用法	8 He is honesty <b>itself</b> .	Ib
	8 I am <b>all</b> attention.	Ia
	9 Carbonic acid (gas) is not a poison <b>in itself</b> .	VII_8
	10 I live all <b>by myself</b> .	VII_7
	10 I cannot finish it <b>by myself</b> .	VII_7
	12 I did not call him; he woke up <b>of himself</b> .	VII_9
III. Of の連語	18 I sent him a pheasant <b>of my own</b> shooting.	XLII_4
IV. One, the other, this, that などの用法	25 To know is <b>one thing</b> , to practise is <b>another</b> .	XIII_10
	26 The tail of a fox is longer than <b>that</b> of a hare.	XIII_2
	27 The ship was built in less than a year, <b>and that</b> in the midst of the war.	XII_3
V. too --- to---, not --- too much などの用法	28 You are <b>too</b> young <b>to</b> understand such difficult things.	XLV
	28 He is <b>too</b> wise <b>not to</b> know it.	XLV
	30 We <b>cannot</b> praise him <b>too</b> much.	XLVI
	30 It is <b>impossible</b> to <b>overpraise</b> him.	XLVI
VI. As (so) --- as, so as to, so that, for fear lest などの用法	31 Any book will do, <b>so long as</b> it is interesting.	LXXI
	32 I got up early <b>so as to</b> be in time for the express.	LXXI_2
	33 I got up <b>so</b> early <b>that</b> I was in time for the express.	LXXIV_4
	33 I got up early ( <b>so</b> ) <b>that</b> I might be in time for the express.	LXXIV_3
VII. Such --- as, such that, so much, so many, not so much --- as などの用法	35 Do not trust <b>such</b> men <b>as</b> praise you to your face.	VII_1
	36 He is <b>not so much</b> a scholar <b>as</b> a writer.	LXXI_5
	36 He cannot <b>so much as</b> read his own name.	XIII_23
	37 He is rather hot-tempered, and owns <b>as much</b> .	XIII_20
	37 What takes you only three hours, takes me <b>as many</b> days.	XIII_20
40 They worked hard like <b>so many</b> ants.	XIII_19	
VIII. 比較表現のいろいろ	42 He can <b>no more</b> swim <b>than</b> a hammer can (swim). / He can not swim anymore than I can fly.	XVII_1_2
	42 John is <b>no less</b> clever <b>than</b> Jim.	LXXV_10
	43 He is <b>as</b> brave <b>as</b> any man alive.	LXX_2
	43 He is <b>as</b> brave a man <b>as ever</b> breathed.	LXX_3
IX. Few, a few; little, a little; seldom, hardly など	46 The book has <b>few</b> faults.	XIII_24
X. both --- and, not only --- but also など	48 He has <b>both</b> experience <b>and</b> scholarship.	LXVII_3
XI. 時の前後	51 We had <b>no sooner</b> got on shore <b>than</b> it began to blow hard.	LXXV_9
	56 <b>Whatever</b> the matter may be, do your best.	XI
XII. May, might などの用法	56 <b>Be</b> the matter what it <b>may</b> [will], do your best.	XXXII_2
	58 One <b>should</b> obey the dictates of one's conscience.	XXXV
XIII. Shall, should などの用法	59 What a pity that things <b>should</b> have come to this!	XXXVI
	59 I am surprised that you <b>should</b> say so!	XXXVI
	59 Who are you that you <b>should</b> speak thus to me?	XXXVI
XIV. Will, would などの用法	64 <b>Would</b> that I were young again!	XXXIV_1

山崎の大分類	山崎の小項目	南日
XV. 習慣的行動を表現する仕方	65 He <b>would</b> often come home drunk and complain about his boss.	XXXIV_2
XVI. 仮定法のいろいろ	69 <b>Should</b> I fail this time, I would try again.	XXXVII
XVII. 命令法で条件を示すものなど	72 <b>Persevere, and</b> you will succeed.	XXXII
XVIII. 不定詞と過去分詞	74 She wept <b>to see</b> her son in such a plight.	XL_2
XIX. 動名詞と分詞	79 There is <b>no staying</b> at home in this fine weather.	XLII_3
	79 It is <b>no use</b> crying.	XLII_3
XX. 文章中で遊離要素となる不定詞と分詞	83 He knows German and French, <b>to say nothing</b> of English.	XL_3
XXI. What の用法	87 Coal and iron have made the country <b>what</b> she is.	VIII_3 ex.84,85
	88 He is handsome, clever, and <b>what</b> is better still, very rich.	VIII_3 ex.89
	89 I will give you <b>what</b> money I have.	VIII_5 ex92, 91
	90 Leaves are to the plant <b>what</b> lungs are to the animal.	VIII_3 ex.87,88
XXII. いろいろの使い方のある but	93 He is <b>nothing but</b> a student.	LIV_5
	95 He is <b>anything but</b> a scholar.	LIV_4
	95 He is <b>all but</b> dead.	LIV_6
	96 There is <b>no rule but</b> has exceptions.	VIII
	99 I <b>never</b> see you <b>but</b> I think of my brother.	LXIII_4
	99 I <b>never</b> see you <b>without</b> thinking of my brother.	LXIII_5
	100 <b>But for</b> his idleness, he would be a good student.	LVII_5
	102 It is <b>true</b> its flower is beautiful, <b>but</b> it bears no fruit.	LXXII_3
103 <b>Not that</b> I dislike the task, <b>but that</b> I am unequal to it.	LXXIV_2	
XXIV. Do の注意すべき使い方	105 He <b>does</b> work hard, but somehow he remains as poor as ever.	LXIX_3
XXV. 動詞、形容詞などを名詞中心の句で現わすもの	107 He had <b>the kindness to</b> show me the way.	II_1

読解の際に誤りを犯しがちな項目で、山崎（1979）には含まれていないものの、最近の「構文」主義の英文解釈書である岡田（2000）にも含まれている項目であり、その意味では、南日は学習者が読解の際に困りそうな点を理解しており、また、このような点で、山崎よりも優れていると言える。

次に、南日（1903）において語彙項目が多く含まれているという点は、特に PART VI. PREPOSITIONS と PART VII. CONJUNCTION のパートで顕著である。前置詞のパートでは、13項目に60の前置詞・複合前置詞句が含まれ、一方、接続詞のパートでは、接続詞および複合接続詞が41項目含まれている。また、PART III. ADJECTIVE のパートに‘XIX “To get the better of”,’ ‘XX “To make the most of”,’ ‘XX “To make the best of”’ のような内容語を中心とする熟語が多く含まれている。また、PART IV. VERBS の XXXI. では不定詞を

従える動詞が13も列挙されている。

逆に、山崎（1979）においては、そのような熟語的なものは少ない。そのかわりに、「XVI. 仮定法のいろいろ」のセクションでは、仮定法の基本形に始まり、条件節が省略されたり他の要素に隠れている場合の仮定文など、学習者がつまづきやすい項目を丁寧に解説している。また、「XVII. 不定詞と過去分詞」77、78において、使役動詞の項目を含んでおり、文の構造への関心がより見られる。さらには、先に述べたが、「XI. 時の前後」での関連「構文」を多く含んでいる。

以上見てきたように、南日（1979）において既に「構文」主義は十分に見られるが、どちらかというとなら文法への傾きが大きいのと、「構文」とは言えない熟語が多く含まれている。ただし、文法への傾きに関しては、生徒達にとって読解上問題となる項目を含んでいるという良い点もある。その意味では、山崎（1979）は「構文」主

義がより徹底していると言える。

#### 4. 「構文」のケーススタディ：“not so much ~ as ~”

受験英語の系譜を考える上で、「構文」の間テキスト性、相互影響関係を具体的に見るために、その一つである“not so much ~ as ~”の例文を考察する。

現代英語の語法を歴史的観点からコーパス調査を行った田島編（1995）は、コーパスにより“not so much ~ as/but ~”を調査している。その中で、

語法書・文法書でこの相関語句に言及しているものは僅かに4点である。いずれもアメリカ系のものであるが、Copperud（1964, 1970, 1980）とBernstein（1965）は、‘not so much A as B’の代わりに‘not so much A but B’を明確に誤用（incorrect）としている。

と述べ、英米ではあまり注目されていない事を指摘している。同時に、日本の辞書がこの語句を詳しく記述していることも指摘している。しかしながら、受験参考書への言及は全くない。しかし、これは明らかに受験英語「構文」である。

実際、南日（1904）は、既にこの「構文」を取り上げ、Part VIII. Conjunction の LXXI “Not so much ... as” という項目を立てている。そこで挙げている例文は以下のようなものである：

1142. A man's worth lies not so much in what he has as in what lie is.

1143. The important thing is not so much that every child should be taught, as that every child should be given the wish to learn.

1145. It is not so much, the hours that tell as the way we use them.

さらに、日本語訳の部分では次のような解説を与えている：

以下1145に至る迄凡て“not so much a as b” (=b rather than a) として解釈を下すべし。例へば：It is not so much knowledge as practice, that is really important. =It is practice rather than knowledge, that is really important.

先の田島編（1995）の引用から明らかなように、英米の語法書ではあまり注目されなかった語法が、既に明治後期の英文解釈法で扱われており、なおも現在の日本の英語辞書において詳しく扱われているのをみると、日本の英語辞書、語法・文法書に与えた受験「構文」のインパクトの大きさが伺われる。また同時に、こういった機能語を中心とした「構文」をわざわざ取り上げた南日の慧眼にも驚く<sup>4)</sup>。南日は一体こういった構文の『ネタ』をどこから取ってきたのかと言うことは興味深い、当

時流布していた文法書などを調査する必要がある<sup>5)</sup>。

更に問題となるのは、このように一度措定された「構文」が見直されず再生産されてきたことである。

本論で南日（1903）と比較した山崎（1979）においても、この「構文」は扱われている。ただし、その際、同義的な表現を挙げて説明を加えている点では、進歩したといえよう。

ちなみに、英文解釈書ではないが、昭和3年発行の齋藤秀三郎『齋藤和英大辞典』では、「じんぶつ〔人物〕」の項で次のように、南日（1904）と全く同じ例文を用いている<sup>6)</sup>：

◆人間の価値は財産にあらずして人物にある A man's worth lies not so much in what he has as in what he is.

南日は齋藤の正則英語学校で学んだ経験があるが、この例文をもって、齋藤が南日から引用したと主張するものではない。共通の源泉があるか、あるいは、南日が齋藤の著作から取ったと考える方が自然であろう。

なお、この例文は同義的な構文で、岡田（2002）でも採用されている：

構文37 what one is, etc.

068. One's worth lies not in what one has but in what one is. (人間の価値はその人の財産にあるのではなく、その人柄にあるのだ。)

このように、「構文」の重なりはもちろん、例文が異なる著者により使い回しが多いと言う事実も、「構文」の系譜を考える上で興味深い。

なお、これらの例文に関して、もう一点考えるべき問題がある。それは、使い回しされてきた例文がある種の倫理観を表明している点である（cf. 外山（1979：41）、川澄（1979：93））。つまり、先の例文で言えば、日本人が人の価値を what one has と what one is に関係づけるのが好きなのか、あるいは、立身出世主義的な明治時代に合った例文がそのまま継承されてきたのか（cf. 山口（2001）：130-133）。後者の点で言えば、南日（1903）が例文を取った原典が *Self-Help* や *Franklin's Autobiography* であることも関係があると考えられるので、原典との関係の調査もなされる分野であると言える。

#### 5. おわりに

本論では「構文」の相互影響関係を考察した。当然、これ以外の小野圭次郎の著作などとの比較もこれから必要である。一方ではこのように、下った時代への考察が必要であるが、もう一方では、時代を遡り、南日がいかにして、「構文」主義の英文解釈法の祖となる『難問分類英文詳解』を集成するに至ったのかを解明する必要がある。

南日の経歴を考えれば、齋藤秀三郎の著作に当たる必要がでてくるのは当然である。さらには、齋藤がイデオモロジー (idiomology) を生み出す上で非常に強い影響を受けた James Main Dixon の著作に遡る必要があろう (cf. 大村 (1960))。

さて、学問的な分野と、英文解釈法の関係を管見しておきたい。英文法では、主として文単位の研究がなされてきて、個々の文と関連する文の違いなどの詳細な統語的・意味的研究がなされてきた。また、談話分析や語用論など文以上の単位を扱う分野も生じた。これらを含む英語学は、局所的なニュアンスや同義文の相違などの照明において貢献したことは確かだが、日本人の英語読解力の増進に貢献したとは言えない。同様に、「受験英語」を批判してきた英語教育も、外山 (1979) が「近代の日本が生んだ誇るべき独創的体系化」と呼んだ英文解釈法に取って代わるものを、何も提供できていないのである<sup>7)</sup>。実際に、「構文」主義の英文解釈法の問題点を見据え、「構文」主義の英文解釈法の代案となるものを提案したのは、予備校で教えていた伊藤和夫の『英文解釈教室』くらいではないか。

日本語と、インドヨーロッパ系で、ラテン語の影響を受けて発達してきた西欧の言語である英語という、系統的に全く異なった2つの言語体系の間を取り持つ手段として「構文」主義の英文解釈法が担ってきた役割は、過小評価できない。

「構文」が時代遅れであり、それ自体意味がないという批判もあるが、「構文」主義の英文解釈・英作文に取って代わる代案を示すことができないのであれば、「構文」を現代のニーズに適応するように改訂を試みる方が意義があると考えられる。また、伊藤 (1997) の指摘にあるように、「構文」の「選択が恣意的」とであるという批判も考慮し、コーパス調査とインフォーマント調査により、表現としてより有用度の高い「構文」を選択しなおす必要があろう。

英文解釈書の出現が明治30年代後半で、その範となった英文が19世紀ビクトリア朝のもので、それを改訂せずに再生産されてきたことが、現代の英語と「構文」のズレの原因であると考えられる。英語自体は、形態論・統語論・文体等で、その間にも変化はしてきたが、受験「構文」として扱われたものの一部が今では時代遅れとなった可能性は確かにあるが、田中 (1990) を見れば、今までの批判はくつがえされている。

また、冷静さを欠いた議論の多い中、外山 (1979) の次の3つの英文解釈法批判は的を射ている：1) 漢文読解と同じように、「一種の半翻訳言語」として英語を考えさせる英文解釈法が英語の習得を妨げる、2) 英文解釈法がシングル・センテンス単位で、パラグラフを考えない、3) スタイル・レトリックの軽視。これらの点を

超えるような英文解釈法として、外山は佐々木 (1980) を挙げている。しかし、これは大学生以上のレベルを想定しており、その点、より初等学習者向けの同様の書籍が望まれるであろう。

また、外国語である英語の場合、現在よく主張されがちな英文の大意・概要を取るというトップダウンのアプローチの前に、ボトムアップから英文の意味を取るアプローチを十分に教授する必要がある (cf. 伊藤 (1997: 27-31))。この感は、最近の学生を観察しているとますます強くなる。その意味でも、「構文」を再考し、再評価する必要があると考える。

最後に、齋藤の Idiomology、「構文」、動詞型 (Palmer, Hornby が考え出したものだが、日本だからこそ生まれた) のどれをとっても、明治期以降の教育用の英語研究では、文法によりながらも、フレーズとかコロケーションとでも言うべき構造体への関心が常にあったことは非常に興味深いことである。

## 注

1. 例外的に受験英語を扱ったものとして、荒牧 (1968) と速川 (1990・1993) がある。
2. 「構文」、「公式」の現代英語での使用法、頻度、容認度に関しては、インフォーマントによる調査を田中 (1990) が、また、インフォーマントとコーパスによる調査を鷹家・林 (2004) が行っている。また、一部の「構文」について、田島編 (1995) が、現代英語を歴史的な観点から考察している。
3. 山崎 (1979) を用いるもう一つの理由は、「構文」主義の英文解釈書の人気を減少させるのに大きな役割を果たした『英文解釈教室』の著者である伊藤和夫が強く意識したのが、山崎 (1979) であることである (cf. 伊藤 (1997))。
4. “not so much ~ as ~” の場合、“not so much ~ but ~” が存在していることからわかるように、「日本人の理解しにくいという理由」だけで採用したのではないことが理解できよう。英米人の言語感覚でも、誤用が起きる程度に、通常の比較表現とは異なることが意識されていることがわかる。この点については、LDOCE 3<sup>rd</sup> ed. の *much*<sup>1</sup> adv. 8. “not so much ... as ...” 及び、特に *Longman Advanced American Dictionary* の *so*<sup>1</sup> adv. 8. “sb /sth is not so much ... as ...” の定義を参照のこと。
5. 『難問分類英文詳解』の後継書であり、「構文」主義がより徹底している『英文和訳法』(1914) について、荒牧 (1968: 331) は南日恒太郎と会談し、南日が「まねるものがないから、自分ひとりで組織立てをした」旨を語ってくれた」と報告している。

6. 『齋藤和英大辞典』では、“not so much ~ as ~”に関して、本文中で引用した例文以外にも次のような例が引用されている：

- ◆ 幸不幸は境遇よりも気の持ちようだ  
Happiness depends not so much on circumstances as on one's way of thinking.
- ◆ 温泉そのものよりも転地が利くのだ It is not so much the hot springs themselves as the change of air that does one good.
- ◆ 彼は学者というよりも文章家の方だ He is more of a writer than a scholar — He is not so much a scholar as a writer.

ちなみに、最後の例の“not so much as ~ as ~”の例文は、山崎（1979）のp.82でも、全く同じ例文が引用されている。山崎が、齋藤の正則英語学校で学び教えた経験があることを鑑みると、当然とも言える。

7. 受験英語を批判してきた人たちは、一般的に学校教育を受け正規のルートを歩んできた人たちで、一方、英文解釈書の著者には南日恒太郎、吉川美夫、柴田徹士の諸氏のように、独学で難関の旧制高等学校英語科教員検定試験を合格して教員になった人たちがいることは、ある意味で非常に興味深い。更に、批判している側の人たちの中に、実はその受験英語のまさに元となる入試問題を作成する人達が存在することは、一種の自己矛盾ではなからうか。

#### 参考文献

- 荒牧鉄雄. 1968. 「受験英語」日本の英学100年編集部編. 『日本の英学100年 大正編』pp.327-337. 研究社.
- 伊藤和夫. 1977. 『英文解釈教室』研究社.
- . 1997. 『予備校の英語』研究社.
- 大村喜吉. 1960. 『齋藤秀三郎伝—その生涯と業績』吾妻書房.
- 岡田伸夫監修. 2002. 『英語の構文150 New Edition』美誠社.
- 河上道生. 1991. 『英語参考書の誤りとその原因をつく』大修館書店.
- 川澄哲夫編. 1978. 『資料日本英学史2 英語教育論争史』大修館書店.
- 川澄哲夫. 1979. 「英語教育存廃論の系譜」『現代の英語教育 第1巻 英語教育問題の変遷』pp.92-136. 研究社.
- 齋藤秀三郎. 1980 (1928). 『齋藤和英大辞典』名著普及会.
- 佐々木高政. 1980. 『新訂 英文解釈考』金子書房.
- 鷹家秀史, 林 龍次郎. 2004. 『詳説 レクシスプラネッ

- トボード—103人のネイティブスピーカーに聞く生きた英文法・語法』旺文社.
- 竹内 洋. 1991. 『立志・苦学・出世—受験生の社会史』講談社.
- 昭和女子大学近代文学研究室編. 1970. 「南日恒太郎」『近代文学研究叢書 第29巻』pp.17-53. 昭和女子大学.
- 高梨健吉. 1979. 「英学のあゆみ（幕末から明治末まで）」『現代の英語教育 第1巻 英語教育問題の変遷』pp.2-32. 研究社.
- 田島松二編. 1995. 『コンピューター・コーパス利用による現代英米語法研究』開文社.
- 田中茂範. 1990. 『データに見る現代英語表現・構文の使い方—ネイティブ100人に受験英語の使用実態を徹底調査』アルク.
- 速川和男. 1990. 「英語学習参考書の研究—英文解釈参考書の系譜(1)」『日本英語教育史研究』第5号. p.159-181.
- . 1993. 「英語学習参考書の研究—英文解釈参考書の系譜(2)」『日本英語教育史研究』第8号. pp.161-179.
- 出来成訓. 1994. 『日本英語教育史考』東京法令出版.
- 外山滋比古. 1979. 「英文解釈法」『現代の英語教育 第5巻 読む英語』pp.30-49. 研究社.
- 南日恒太郎. 1903. 『難関分類英文詳解』ABC出版社.
- 山口 誠. 2001. 『英語講座の誕生—メディアと教養が出会う近代日本』講談社.
- 山崎 貞. 1979. 『新々英文解釈研究』（9訂版, 佐山栄太郎改訂). 研究社.
- Hornby, A. S. 1975. *Guide to Patterns and Usage in English*. 2nd Ed. London: Oxford UP.